

研究ノート

シアトル日本町の今

田 中 泉*

1. はじめに

2009年現在、アメリカ合衆国本土において、日系人または日本人の文化がまとまって残っている地区として、カリフォルニア州のサンフランシスコとサンノゼに「日本町 (Japan Town)」が、またロサンゼルスには「リトル・トーキョー (Little Tokyo)」⁽¹⁾が存在する。この3地区は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本から移民した人々によって各地で形成された日本人街の名残である。そこには、日本語の看板を掲げた日本料理店、ホテル、食料品店、書店、雑貨店、寺院、銀行などが立ち並び、その一角には、日本人街であることを示す象徴的な建造がある。それはたとえば、サンフランシスコ日本町の円形屋根が重なった五重塔であり、サンノゼ日本町の本願寺別院の本堂であり、ロサンゼルスのリトル・トーキョー入口の櫓である。これらの地区には、近年、明らかに日本人ではない人が経営する日本料理店や、ハングルや中国語の看板の商店が増え、「日本人の町」とは言えなくなっているが、日系人や日本人も居住し、街を歩けば日本語も聞こえてくる。一方、これらの地区は、歴史的遺産としての価値も求められている。サンフランシスコ日本町には全米日系アメリカ人歴史協会 (National Japanese American Historical Society)⁽²⁾が、ロサンゼルスのリトル・トーキョーには全米日系人博物館 (Japanese American National Museum)⁽³⁾があり、日本人移民や日系アメリカ人の歴史を次代に残す努力がなされている。

しかし、日本からの移民が形成した日本人街はこの3地区だけではない。かつては、ワシントン、オレゴンおよびカリフォルニアの西海岸3州において、日本人街が数多く存在した。それらの多くは、第二次世界大戦中の強制収容によって日本人・日系人が立ち退かされ、日本人街としての様相や機能が大幅に縮小されるか失って

* 広島経済大学経済学部教授

しまっている。本稿で論じるワシントン州シアトルもその一つである。

かつて日系人や日本人の多く居住する海外の日本人街では、日本語新聞が発行されていた。しかし、その数は減少している。2009年には、サンフランシスコ日本町で発行されていた日本語新聞である『日米タイムズ』が廃刊、『北米毎日新聞』が休刊となった⁽⁴⁾。いずれも、資金調達が難しくなったことが原因である。現在のシアトルには、『北米報知』という日本語新聞があるが、これも当初は日刊の時期があったが、週刊となっている。このことは、単に日本語新聞を購読する日本人が減っているだけでなく、日本人街や日本人社会の衰退を示していると言えよう。事実、かつてシアトル日本町のあった地区には、わずかに日本料理店数軒と日系スーパーマーケット「宇和島屋<写真1>」を見出すのみで、中国系やベトナム系のレストランや食料品店が目立っていて、南キング通りの5番街と6番街の間には「チャイナタウン」の入り口を示す中華風の門<写真2>がある。ガイドブックの地図などには、「日本町」ではなく、「インターナショナル地区 (International District)」と表示されている。



<写真1> 宇和島屋ビレッジ



<写真2> インターナショナル地区入口
(写真1, 2とも筆者撮影 2009年8月26日)

そこで、本稿では、2009年8月に、インターナショナル地区にある『北米報知』新聞社、および日本人社会の拠点の一つである浄土真宗本願寺シアトル別院を訪れ、関係者にインタビューし、現在の日本人・日系人社会について問うた内容を分析し、西海岸にある日本人街としての位置づけをするとともに、日本語新聞としての『北米報知』の将来性を論じる。

2. シアトル日本町略史⁽⁵⁾

シアトルが建設されたのは1851年で製材所（ソーミル）の町として発展した。1880年では人口3553人であったのが、1890年には4万4748人に急増し、1900年には8万人を越えた⁽⁶⁾。1883年にノーザンパシフィック鉄道が開通してシカゴと結ばれ、1893年のグレートノーザン鉄道が開通してセントルイスと結ばれ「鉄道の町」となり、1897年に生じたアラスカ・ゴールドラッシュによって物資集散地となって発展を続けたためである⁽⁷⁾。

その間で、日本人がこの町に定着し始めたのは、1887年頃からとされ、南ワシントン通りと三番街を結んだ付近に日本人の経営によるホテル、食堂、商店、食料品店などが出現し、日本人街の様相を見せ始めたようである。1896年に、日本郵船会社の神戸・横浜～シアトル航路が就航するようになると、シアトルはアメリカ本土にやって来る日本人の窓口となり、日本人はこの町から、タコマなど近郊都市のみならず北西部諸州、そして全米に大陸横断鉄道を利用して散って行った⁽⁸⁾。1898年には日本人労働者を鉄道保線などの仕事に斡旋する「桂庵」が登場し、翌1899年には日本国領事館が設けられた。シアトルに居住する日本人は、1899年に400人であったのが、1901年には1508人、1905年には2726人と増え、1908年には7000人を超えピークに達した⁽⁹⁾。この急増の背景には、合衆国に併合されたハワイからの転航がある。以後、1906年のハワイからの転航禁止、1908年の日米紳士協定による新規移民の抑止や、シアトル近郊への農業定着の影響により、シアトルの日本人は逡減する。

シアトル日本町は、南北方向は南ワシントン通りから南レーン通りまでの5ブロック、東西方向は3番街から7番街までの5ブロックであり、ホテル・和式旅館、洋食レストラン・日本料理店、劇場、銀行、新聞社、桂庵、医院・歯科医、薬局、写真館、銭湯、魚屋、時計屋、雑貨屋などが軒を連ねていた。また、現在のユニオンステーションにあたる4番街と5番街に挟まれたキング通りの南北は、「ピンクハウス」と呼ばれた売春街になっていた⁽¹⁰⁾。この日本町を利用したのは、日本やハワイから船でシアトルに上陸して就労先を探していた人や、近郊で製材業、漁業、農業、鉄道保線、鉱山業などに従事して働き休日に休養や娯楽のために訪れた人である。

アメリカに居住する日本人たちは各地で日本人会を結成したが、シアトル日本町でも1899年2月11日に「日本人会」が発足した。当初は個人会員制であったが、1907年2月に県人会や各種団体の代表者による機関として「華（ワシントン）州日本人会」と改名した。それに反対する人たちは1910年4月に「シヤトル日本人会」を立ち上げたが、結局、両者は1912年4月に合併し「北米日本人会（The Japanese

Association of North America)』となった。⁽¹¹⁾

シアトル日本町で最初に発行された日本語新聞は、1901年2月に「日本人会」によって創刊された『日本人』で、翌年には週刊から日刊化されたが1904年には廃刊となった。その内容は、日本人社会の消息や、日本の国内情勢、アメリカの新聞の翻訳、小説、および広告であった。その後、1902年に『北米時事』（～1942年3月）、1905年に『旭新聞』（～1918年3月）、1910年に『大北日報』（～1942年2月）が創刊され、3紙鼎立の状況となった。『北米時事』と『大北日報』の廃刊は、太平洋戦争勃発に伴う日系人強制収容によるシアトルからの立ち退きのためである。⁽¹²⁾

日米開戦の時点でワシントン州・オレゴン州の海岸寄りに居住していた日系人・日本人は約1万人で、主にアイダホ州に作られたミネドカ収容所に収容され、シアトルをはじめ、タコマ、ポートランドなどにも形成されていた日本人街は消滅したのである。

3. 『北米報知 (The North American Post)』⁽¹³⁾

『北米報知』は、1946年6月19日、生駒貞彦によって創刊された。⁽¹⁴⁾当初は週刊であったが、週3回発行を経て、1954年には日刊となった。創刊時に編集長に就任したのは、有馬純雄である。有馬純雄は、『北米時事』が1942年に廃刊となった際の社長（第4代）兼主筆で、その父は第2代社長有馬純清、兄は第3代社長有馬純義であった。⁽¹⁵⁾したがって、『北米報知』は、名前こそ違うものの、『北米時事』の後継紙であるといえる。事実、現在、『北米報知』のウェブサイトをみると、「創刊1902年」と記載され、2002年には「創刊百周年記念号」が発行されている。また、有馬純義は、開戦前の1941年11月に日本に帰国していたが、東京から『北米報知』にコラムを掲載した。⁽¹⁶⁾

現在の『北米報知』の社長は、トミオ・モリグチ（森口富雄）氏である。インターナショナル地区の6番街にある事務所にモリグチ氏を訪ねた。⁽¹⁷⁾事務所・編集室は、日系スーパーマーケット「宇和島屋」が2000年に移転する前の日本風建物の2階にある〈写真3～6〉。モリグチ氏は、1936年タコマ生まれ、その「宇和島屋」の取締役会長でもある。

「宇和島屋」は、モリグチ氏の父親モリグチ・フジマツ（森口富士松）氏が、愛媛県八幡浜市から移民してきて、1928年にワシントン州タコマで創業した魚の練り製品をトラックで販売して回る商店が起源である。⁽¹⁸⁾この商店は、1942年に強制収容により閉店した後、戦後、シアトルに移って日本町で再開した。現在、「宇和島屋」は、店内に生簀を備えて活魚や刺身を販売するほか、青果物や精肉、日本から輸入



<写真3> 北米報知新聞社が入る建物



<写真4> 北米報知新聞社の看板



<写真5> 事務所・編集室



<写真6> 事務所・編集室入口

(写真3～6はすべて、筆者撮影 2009年8月26日)

した食品・飲料・雑貨類を販売する大きなスーパーマーケットになっている。店内には、フードコート、書店（紀伊國屋）もある。この本店舗以外に、シアトル郊外のベルビューをはじめ3店舗の支店を展開している。1962年の父親の死後「宇和島屋」の社長を引き継いだトミオ氏が『北米報知』の社長となったのは、現在より約20年前で、前任のクボタ氏から引き継いだとのことであった。

モリグチ氏によれば、『北米報知』は、日刊であった時期からしだいに刊行回数を減らし、現在は、毎週水曜日のみ刊行の週刊になっている。発行部数は、通常2500部で、その内約800部をメール便で送っている。あとは、日系の商店やレストランにおいて、フリーで配っている。購読者が減った原因は、日系人が減ったこと、異人種間結婚が増えたこと、インターネットの普及で日本のニュースを知るために日本語新聞を読まなくても入手できること、若者が新聞を読まなくなったことなどが考えられる。このことは、日本語新聞だけでなく、アメリカにおいては一般的傾

向であるが新聞の読者が減り、新聞社の経営は苦しくなっている。本来、新聞は購読料による収入よりも掲載する広告料による収入の方が重要であるが、発行部数が減ると広告も集まりにくくなるのである。約800人の『北米報知』の定期購読者も、この新聞社をサポートする意図で購読していると思われる。モリグチ氏が社長に就任した要因の1つに、「宇和島屋」の広告料への期待があったのだろう。

新聞の紙面は、日本語5ページと英語3ページ、日・英両語併記4ページの合計12ページで構成されている。日本語ページの内容は、主にローカルニュース、特集コラム、連載エッセイ、死亡・葬儀告知、川柳投稿などで、英語ページの内容はローカルニュース、死亡・葬儀告知などである。日・英両語併記ページは、コミュニティカレンダー、クラシファイド、コミュニティサービス案内などである。広告も、それぞれのページに合わせて、日本語、英語、日・英両語併記がある。

『北米報知』社の有給スタッフは4人で、ゼネラルマネージャー（梶田重喜氏）、編集者（佐々木志峰氏）、デザイナー（渡邊美和氏）および経理（アンジェリ・曜子氏）であり、このほか、ボランティアやインターン数名により、紙面が作成される。ボランティアの中では、リサーチャーとして活躍するジョン・R・リッツ氏が重きをなしているようである。

ゼネラルマネージャーの梶田重喜氏は、宇和島市出身、50歳代後半とみられる。最初は、留学で来て、そのまま居る。現職に就く以前は、コミュニティカレッジなどで日本語を教えていたそうである。在米25年。マネージャーの仕事は、「広告をとってくること、購読者を増やすこと、印刷会社と交渉すること、新聞を置いてもらう商店などを増やすこと」と幅広い。経営難については、「サンフランシスコの『日米タイムズ』が廃刊になったが、経営が苦しいからといって、購読料を下げたのが、かえって、響いたのかもしれない。購読料や広告料が高いから購読者が減っているわけではない」と安易な値下げを否定し、読者のニーズに合った紙面を作るべきだとする。そして、「いい記事を書かせるために、お金の心配をさせないようにするのが、自分の仕事だ」と言う。

その記事を書く編集者の佐々木志峰氏は、東京出身、30歳前後とみられる。2001年に渡米、オレゴン大学（ジャーナリズム）を出て、2004年5月に入社した。「購読者を増やすために、紙面構成を工夫している。経費削減のために日本の通信社などとの提携契約を切ったため、日本のニュースは少なめにして、こちらのコミュニティの様子がわかる内容を増やしている。新書本の紹介（「新書で知る日本の最新事情」）などや、日本に住んでいる個人の協力者にコラムやエッセイを書いてもらっている」と述べている。

確かに、日本語と英語のローカルニュースを比較すると、日本語ページは地方政治や行政、経済などの一般的なニュースが多いのに対して、英語ページは日系人社会に関するニュースが多い。この点では、『北米毎日新聞』が双方で同じ内容のニュースを扱っているのとは対照的である。つまり、『北米報知』のほうは、日本語ページが日本人向け、英語ページが日系人向けと対象読者を明確にしてあると言える。また、『北米毎日新聞』と比べると、世界や全米レベルのニュースおよび日本国内のニュースが載せられていないことも、特徴であろう。『北米毎日新聞』は、日本の『毎日新聞』と資本提携こそないものの、記事の配給を受けていた。『北米報知』が記事の配給を受けなくなったのは、ローカル以外の世界や日米国内のニュースについては、読者自身がテレビやインターネットで獲得可能な情報であると判断した結果であろう。

『北米報知』社の3名が述べた内容は、日本語新聞が生き残るためのヒントを示唆するものであろう。それは、当然ながら対象読者のニーズを意識した誌面構成であり、すなわち、地域に居住する日本人や日系人のコミュニティ向けの記事に徹底することなのであろう。社長のモリグチ氏自身も、「日系人コミュニティの存続に努力している。いろんな組織の理事会に加わり、発言もし、支援もしている」と述べている。実際、インタビューした翌日は、日本人会のゴルフ大会で、この日も「午後からその準備があり忙しいのだ」と述べていた。

4. シアトル本願寺別院⁽¹⁹⁾

シアトル本願寺別院（浄土真宗本派本願寺派）＜写真9＞は、インターナショナル地区から、南メイン通りを東へ5ブロック目にあり、かつての日本町の中心からは離れている。『北米報知』社を訪ねた後、この仏教会に行き、輪番の松林芳秀開教使⁽²⁰⁾にインタビューした。シアトルの仏教会は、1901年に設立され、現在の建物は、1941年建立されている。本堂に入ると、祭壇は、日本の浄土真宗の寺院によく見られるような金箔を多く使用した立派なものであった。また、門徒の席は、以前に調査したサンノゼ別院やパークレーの同派仏教会と同様に、まるでキリスト教会のように長椅子が並んでいるものであった＜写真10＞。また、通りの向かい側の広場には梵鐘が設置されていた。

松林氏は、ハワイ生まれで、小学校の時に、父親の故郷である島根県の鹿賀（現、江津市桜江町鹿賀）に帰り、父親は、福泉寺の住職であった。地元の高校を出て、龍谷大学に入学、大学院に進学し、僧職の資格を得た。その後、ハワイに戻り、ホノルル、コナ、エワ（ワイパフの近く）で、開教使を務め、1972年にアメリカ本土



<写真9> 本願寺別院の外見



<写真10> 本願寺別院の内部

(写真9, 10とも筆者撮影 2009年8月27日)

に移り、 sacramentなど各地で開教使を務めた。1993～98年には、カナダの開教総長であった。1998年にカリフォルニアに戻り、モンテレー、サリナスの開教使を務めた後、2006年の1月からこのシアトル別院の開教使となったとのことであった。

仏教会と日系人コミュニティの関係について問うと、「アメリカにある仏教会は、門徒の代表である理事会によって運営されるのが、日本のお寺と違うところで、これはアメリカの宗教法人法の規定なのである。住職などがお金を自分の財産にすることを防ぐために、そうになっている。だから、開教使はサラリーマンと同じである」と答えられた。そして、「最近、葬式は少ない。身内だけで簡単に済ませたりして、墓も作らず、散骨したりする。その代わりに、仏教会の主な仕事は、サンデースクールやセミナー、子どもたちの活動（バスケットボールや野球、ボーイスカウトなど）を通じて、日系人の集会所を提供することである」という。これらの点は、カリフォルニアに点在する仏教会と同様で、日系人コミュニティの活動拠点となっている。また、墓地についても、日本人墓地があり、日系人コミュニティによって管理されているとのことであった。

5. お わ り に

シアトル日本町を、サンフランシスコ、サンノゼ、ロサンゼルスなどの日本人街と比較すると、居住する日本人・日系人は少なく、日本人街としての機能は、「宇和島屋」での日本の食品・雑貨などの調達、『北米報知』の発行、そして地理的には少し離れているが本願寺別院というコミュニティ活動の拠点としての仏教会の存在と、かなり限定的である。他の日本人街のように、日系人の歴史を知るための博物館や文化的な施設もなく、また、アメリカの他の地域や国外からの観光客が訪れ

る要素もない。まして、名称も今や「インターナショナル地区」であり、その中に、日系人社会は埋没しているという印象である。

その中で、『北米報知』は、週刊ではあるが、よく健闘していると言えよう。その理由として、その紙面構成や記事内容を対象読者のニーズに絞っていることをあげた。ただ経済的には、やはり、「宇和島屋」をはじめとする日系商店やレストランの広告に支えられているところが大きいのであり、他のコミュニティペーパーのような広告誌になることを防ぎ、どこまで新聞としての体裁を保てるかが今後の課題であると思う。

注

- (1) サンフランシスコ日本町の現況については、拙稿「北カリフォルニア日系アメリカ人コミュニティの最近の動向—サンフランシスコ日本町100周年とジャパンセンター売却問題」『広島経済大学創立四十周年記念論文集』(2007)。ロサンゼルスのリトル・トーキョーについては、多くの文献があるが、エスニシティの視点で日本人街を相対化した研究として南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学—エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社(2007)が有効。また、「シンボル化過程」の視点からの研究成果として、杉浦直「文化・社会空間の生成・変容とシンボル化過程—リトルトーキョーの観察から—」『地理学評論』71号(1998)、887-910ページがある。そのほかに、大谷勲『ロサンゼルス日本人町—四人の女の物語』角川書店(1984)、本田靖春『ロサンゼルス日本人』学研(1986)などの歴史書がある。
- (2) この協会は、第二次世界大戦中の日系人部隊である第442戦闘連隊の活躍を後世に伝えるために設立された「Go For Broke」が起源であるが、現在は、第二次世界大戦中の日系人の強制収容を中心に、資料を収集するとともに、展示や普及活動を行っている。詳しくは、ウェブサイト <http://www.nikkeiheritage.org/> を参照。
- (3) 移民初期から現在までの日本人・日系人の歴史について、資料収集、研究、展示を行っている。詳しくは、ウェブサイト <http://www.janm.org/> を参照。
- (4) 『日米タイムズ』は、9月10日付で廃刊。『北米毎日新聞』は、10月30日付で休刊となった。どちらも資金難が直接の原因である。前者は、NPO「日米ファウンデーション」が組織され、復刊が目指され、後者は資金調達が可能になれば復刊されるかもしれないが、現時点では、どちらも不明である。
- (5) シアトルなどアメリカ北西部に存在した日本人街についての歴史書として著名なものに、伊藤一男『北米百年桜』日貿出版(1969)・『続・北米日本桜』日貿出版(1971)があるが、筆者が参考としたのは、PMC出版により1984年に刊行された復刻版(限定150部)である。また、主にこの歴史書に依拠してシアトルにおける日系人社会形成過程を明らかにした研究としては、加藤雅功「シアトル市における日系人社会の形成過程とその変質」『国際関係研究・国際文化編』第18巻第1号(1997)、29-67ページがある。日本町については、杉浦直の一連の調査による社会地理学的な研究成果が参考になった。すなわち、「シアトルにおける日系人コミュニティの空間的展開とエスニック・テリトリーの変容」『人文地理』48-1(1996)、1-27ページ、「シアトルのアジア人街『インターナショナル地区』のビジネス動向

- と地域的分化—1991—2003—』『季刊地理学』Vol. 56 (2004), 90—105ページ, および「シアトルにおける日系教会の変化・動向と移民社会」『アルテス リバランス (岩手大学人文社会科学部紀要)』第78号 (2006), 73—88ページである。また, シアトルを中心としたワシントン州の日本人移民史を初期の日本語新聞などから分析した研究成果として坂口満宏『日本人アメリカ移民史』不二出版 (2001) がある。
- (6) 在シアトル日本国総領事館『ワシントン州における日系人の歴史』(2000) (伽野野寧『百年との邂逅—ある北米移民—』溪水社 (2005) から重引)。
 - (7) 坂口, 前掲書, 52ページ。
 - (8) 山田勉生『船にみる日本人移民史』中央公論社 (1998), 36ページ。坂口, 前掲書, 53ページ。就航当初は月1便であったが, 1901年からは2週1便となった。ハワイ経由で約1カ月かかったが, サンフランシスコ航路よりも早く到着したため, 利用者が増えた。また, 1909年には, 大阪商船が, タコマ航路を就航させた。
 - (9) 坂口, 前掲書, 56ページ。
 - (10) 伊藤, 『北米日本桜』には, 口絵ページに, シアトル日本町の地図があり, 「ピンクハウス」の表示がある。坂口, 前掲書, 58ページ。
 - (11) シアトル日本人会については, 坂口, 前掲書, 122~126ページ。
 - (12) シアトルの日本語新聞については, 坂口, 前掲書, 96~104ページのほか, 田村紀雄『海外の日本語メディア—変わりゆく日本町と日系人』世界思想社 (2008), 107~118ページに詳しい。
 - (13) 『北米報知』のウエブサイトは, <http://www.napost.com/>。
 - (14) 伊藤, 前掲書, 1067ページの年表。
 - (15) 有馬純達『シアトルの日刊邦字紙』築地書館 (2005)。有馬純達は, 有馬純義の長男で, シアトル生まれ, 小学校より日本で生活する。この書は, 有馬純清以来の一族と『日米時事』の関わりを記述したものである。これによれば, 純清が帰国した初代社長隈元清に代わって第2代社長となったのは, 1913年のことである。
 - (16) 有馬, 前掲書, viページ。
 - (17) このインタビューは, 2009年8月26日に行った。
 - (18) 「UWAJIMAYA (宇和島屋)」の来歴については, ウエブサイトの会社案内・歴史のページを参照。<http://www.uwajimaya.com/jp/locations.html>
 - (19) 杉浦直「シアトルにおける日系教会の変化・動向と移民社会」によれば, 本願寺別院は, 1901年に設立された時は, 同じ南メイン通沿いの6番街と7番街の間, つまり日本町の中心に会堂があり, 日本町の拡大に伴い, 1906年に4ブロック東に, さらに4ブロック東の現在地に移動している。シアトル本願寺別院のウエブサイトは, <http://www.seattlebetsuin.com/>
 - (20) このインタビューは, 2009年8月27日に行った。

[付記: 本稿は, 平成21年度科学研究費基盤研究 (C) (課題番号: 21530998) による研究成果の一部である。]